

## テーマ

## 26 集落と集団の関係をどうとらえるか

伊藤 淳史

日本考古学においては、住居や倉庫などの痕跡の集合体を集落ととらえ、それら遺構の集落内のまとまりや配置から、集団の規模や性格を読み取ろうとする試みを行ってきた。弥生・古墳時代を中心とした学説史的な側面については岩崎(1992)などに的確な整理があり、また近年の動向も含めた課題については松木(2008)をはじめ同書中の諸論攷に詳しい。ここでは、それらに学びつつ、集落と集団の関係を検討するにあたって問題になると思われる点を指摘し、今後に資したい。

まず、「集落」の語の示す曖昧さを指摘しておこう。狭義の集落は、主として日常的な居住行為に関わる空間として用いられている。対して、弥生時代集落で言えば墓域や水田域など、酒井(1990)が説明するような居住空間周囲にひろがる機能空間も含めたものが、広義の集落となる。文献史学や歴史地理学では、この違いを「集落」と「村落」として表現しているかと思われる(例えば、金田1985の38頁など参照)。同時期の住居跡の集合からそれらに住まう人々同士の関係を知るのは、「容器の痕跡から内容物を探ろう」というに等しい作業(岩崎1992)であって、別側面からの情報の支援無くしては解決不能と言える。その意味では、集落を広義に理解しておくメリットの方が大きいかもしれない。しかし、集団での居住という普遍的な営みが、時間や空間を違えて変化し、それがいかなる集団構造や社会組織を反映しているのか、これもすぐれて普遍的で時代や地域を問わない課題である。文献史学等との間で理解に齟齬をきたさないためには、狭義の集落、という意識が重要と考える。「集落研究の枠組は・・・特定の時代に限られない普遍性をもつべきだ」(松木2008)という指摘を、このように受け止めたい。

次に「集団」を問題にしよう。冒頭にも述べたように、日本考古学、とくに縄文～古墳時代を中心とする集落研究は、集落内部の構造から集団を読み取ることに注意を払ってきた。しかし田中良之は、通常ひとつの集落は複数の出自集団で構成

され、集落に居住する集団は出自集団とイコールではないにもかかわらず、日本考古学はその区別をないがしろにしてきた、とする(田中1998)。そして、経営や消費の最小基本単位としての単位集団(近藤1959)というモデルについて、背後にある親族関係や親族組織についての意識が欠落してきたために、集団や共同体の構造や特性に正しい評価を下すことができず、古代史や社会人類学との対比に齟齬をきたしている、と批判する(田中2004)。確かに、仮に単位集団を漠然と近親者の集合体であるとしたままで、集団の結合原理を問うことなくしては、社会組織としてその存在した時代にどのような位相に置かれるのか、それも歴史的に変動しているのか否か、評価できないであろう。すなわち、集落研究において集団を議論するということは、静的で固定的な性格と規模をもった機能体の姿を提出することではなく、集団内の個と個あるいは集団どうしの結びつき方をモデル化し、検証を重ねるということなのである。

上記のような研究の理解は、集落の「分節性」や「統合性」、分節単位をもとにした「単独型」「連接型」「複合型」という区分、それらとの出自集団と居住集団との関連づけ(松木2008)、「基礎集団」「複合型集落」という理解(若林2008)、集団横断的な紐帯といえるソダリティーへの注目(溝口2008)等々、すでに近年の弥生時代集落研究には、反映されつつあるかのようにみえる。ただし、ここで上述の岩崎(1992)の言葉に戻るが、個や集団同士の関係性を居住遺構のみからうかがうことは困難であり、墓制や生産遺構、遺物研究をはじめとした多面的な検証があって、これらは可能となる。逆に言うと、遺跡に具現し集落として把握されるのは、集団のごく一側面に過ぎないという認識をもつ必要があり、血縁や親族構造という枠組み以外の、信仰や禁忌、交易、環境や土地条件といった、集団構造とは一見かかわらないかのような要素がーーそれらの一部は集団間の重要な紐帯となっている可能性も勿論あるがーー、集落内の

遺構配置の重要因子となっている可能性も十分考慮しておく必要があろう。遺跡としての集落でわたくしたちが目にできるのは、一時的あるいは累積的な痕跡の「集合形態」であって、かつその違いが集団構造の違いとストレートに解釈できるわけではないのである。

それでは、先史時代と限らずに集落と集団の関係を理解する場合、どんな作業が最も求められるのだろうか。

歴史時代以降の集落形態については、歴史地理学での小村・集村・疎塊村・散村・孤立荘宅等とする区分が知られている（金田 1980）。あくまで施設の配置や密度にもとづいた形態分類であり、居住集団の構造を指標とするものではない。微地形や土地条件、耕地開発の進展と集村化現象との関連など、考古学が明らかにする情報も活用されながら、集団論と接点を持っていない。一方で文献史学では、共同体としての村落の把握を重視し、村落首長の位置づけや家父長制の実現度、土地所有形態の実態など、社会構造の解明の一環という意識が強い（例えは、吉田 1980）。その点では、集団構造や集団関係論そのものとも言えるけれども、景観や形態としての集落・村落の類型との相関については、積極的な発言は少ない。これらは、それぞれの学問分野の特性に根ざした方向性として至極自然なありようとはいは、文字史料に依らず先史時代以来の長期にわたる変動を取り扱うことの可能な考古学は、積極的に両分野の成果に関与して整合性を検証し、人類史として有意なモデル提供が可能な位置にあるのではないだろうか。

実際、考古学では、一定空間内の遺構や遺跡の密度をもって集住や密集などと表現することがしばしばみられるが、それらの基準の多くは感覚的であるとともに、上述のような集落形態と見かけ上類似している場合であろうとも、その関連が追究されることはない。先史時代と歴史時代では、確かに集落形成の時代背景や社会段階は異なっているかもしれない。けれども、集団構造や、あるいはそれ以外の種々の因子が集落形態と相関している可能性を考慮するならば、比較により共通性や類似性を探ることを通じて因子を浮上させていく努力は無駄では無かろう。さらにそこに、文献

史学が蓄積してきた村落における集団構造の議論もリンクさせれば、景観としての集落形態と、見えない構造としての集団とがいかに相關しているかについて、何らかのヒントが得られるのみならず、異分野間での用語や認識の齟齬の解消にもつながるであろう。

近世における民俗例を無批判に援用してしまったことが誤りであるとするのが、さきに挙げたような「出自表示論」の批判であるけれども（田中 1998）、ミクロな地域史料を徹底して分析し近世社会における集団構造の基層を描く歴史人口学の成果（速水 2009）などは、遺跡情報の蓄積著しい日本考古学にとっておおいに刺激的であり、また参考すべき内容を含んでいると思われる。人類学や民族学の知見にとどまらず、ひろく列島の過去を取り扱う諸分野の成果に積極的に目を向け、列島の環境的特性に根ざした集落形態と集団構造の関係性についてのモデル構築を目指していくことが、最も求められているのではないだろうか。

#### 参考文献

- 岩崎卓也 1992「ムラと共同体」『古墳時代の研究』12：35-54頁、雄山閣
- 金田章裕 1985『条里と村落の歴史地理学的研究』大明堂
- 近藤義郎 1959「共同体と単位集団」『考古学研究』6-1：13-20頁、考古学研究会
- 酒井龍一 1990「拠点集落と弥生社会」『日本村落史講座』2：65-83、雄山閣、
- 田中良之 1998「出自表示論批判」『日本考古学』5：1-17頁、日本考古学協会
- 田中良之 2004「親族論からみた日本考古学」『文化の多様性と21世紀の考古学』100-109頁、考古学研究会
- 速見融 2009『歴史人口学研究 新しい近世日本像』藤原書店
- 松木武彦 2008「弥生時代の集落と集団」『弥生時代の考古学』8：3-16頁、同成社
- 溝口孝司 2008「④弥生社会の組織とカテゴリー」『弥生時代の考古学』8：74-95頁、同成社
- 吉田晶 1980 『日本古代村落史序説』 塙書房
- 若林邦彦 2008 「②集落と集団2—近畿—」『弥生時代の考古学』8：36-57頁、同成社